

ケンペル—ツェンペリー—シーボルト—  
その2 ツェンペリー—

東京大学・法政大学名誉教授

長田 敏行

ツェンペリー (Carl Peter Thunberg) (1743年～1828年)(図-1)は、ケンペル (Engelbert Kaempfer) の83年後に長崎出島に来て1年余滞在し、植物学に関する新情報をもたらしたが、その専門性は高かった。これは前稿(51巻12号)で触れたケンペルが、バロック的であり、社会機構や風俗など広範な話題に興味を持って記述していることと対照的である。

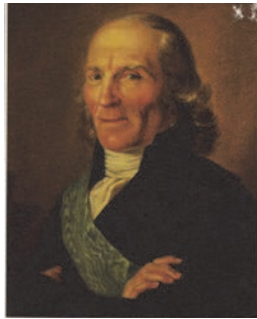


図-1 ツェンペリー  
ネット映像より

彼はスウェーデン南部出身で、ウプサラ大学で医学と博物学を修めたが、分類学の祖リンネ (Carl von Linné) の高弟であることを知ればおのずと納得できる。医学博士号を取得後、医学のさらなる研鑽を目指してパリへ向かうが、その途中でリンネと親しいアムステルダム大学のバウマン (G. Bauman) 教授と会ったことで、その後の彼の世界見聞の道が開けた。半年後パリからバウマン教授の下へ戻ると、彼の才覚を見込んで南アフリカの植物調査と更にその先の日本への道が開かれ、その費用も準備されていたのである。当時南アフリカはオランダの植民地であり、ケープタウンはアジアへの中継基地であった。そこでオランダ東インド会社に属して植生調査を3年間行い、テーブルマウンテンなどの南アフリカの独特の植生を明らかにした。相当な冒険も経験しながら、世界的にもユニークな植生を明らかにしたのである。今日われわれも身近に親しんでいるグラジオラス (*Gladiolus*) やゼラニウム (*Pelargonium*) などはこの地域を原産としており、園芸方面での貢献が大きい。なお、植物の西欧への導入は、彼と共同で調査にあたったイギリス王立キュー植物園のバンクス (J. Banks) により派遣されたマッソン (F. Masson) により行われた。この間にオランダ語も習得できて、バタビアへ向かい、オランダ東インド会社の医官として日本へ向かった。長崎出島では商館の医師として活動し、江戸参府も経験している。そこでは蘭方医桂川甫周・中川順庵らと親しく交わったが、時期は「解体新書」が出た直後で

あった。しかし、出島に閉じ込められている状況には不満で、何度も長崎奉行所へ申し出を行い、ある程度は出島の外へ出ることができたが、多くの役人がついてきて、かれらの費用も払わねばならないことに困惑している。また、家畜の飼料に用いられる植物中にも新奇のものを見出して調査をしている。却って、江戸参府の道中で、駕籠の荷重を軽くするという名目で駕籠からおりて、植物の採集を春先に箱根などで行ったことで大きな成果を得た(長田 2014)。なお、このツェンペリーの状況と前稿で触れたケンペルとの長崎へ来るまでの経緯は著しく異なり、一言触れるに値すると考えるので、ケンペルの辿った過程も簡単に触れる。

## 再びのケンペルについて

ケンペル (1651年～1716年) は日本へ到達するまで数奇な経験を経ている。ドイツ レムゴー市の牧師の子弟に生まれた彼は、叔父が宗教裁判の被害を被ったことから、早く故郷を去り、リュベック、ダンチヒ、クラコフ、東プロイセンのケーニヒスベルクを経て、スウェーデンへ渡ったが、それぞれの場所で医学、博物学他を幅広く学んでいる。スウェーデンでは、その能力を見込まれて、スウェーデン国王カール11世がペルシャへ送った使節団の書記となり、ロシアを経て、カスピ海を渡りペルシャのイスファハンへと至った。当時オスマントルコがヨーロッパを脅かしていたことから、ペルシャとの連携を目論んで、オスマントルコに対抗することが目的であった。使節団は、苦心の末シャーにも拝謁することができたが、本来の目的は果たせなかった。なお、この間に彼はカスピ海に油田があることを調べ、また、ペルセポリスには古代ペルシャの遺跡があることも調査している。更に、そこに楔形文字があることを記載し、それに今日でも使われている Cuneiform と名付けたのは彼である。使節団は本来の目的を果たせなかったとはいえ、ヨーロッパへ帰れば相応の待遇を受けたものと思われるが、彼の母国ドイツはキリスト教の新教と旧教が争った30年戦争の後で荒廃していたので、更なる新天地を求めて東へ向かったのである。オランダ



図-2 リンネ  
ネット映像より



図-3 アオキ  
ツェンペリー著「日本植物誌」  
小石川植物園蔵

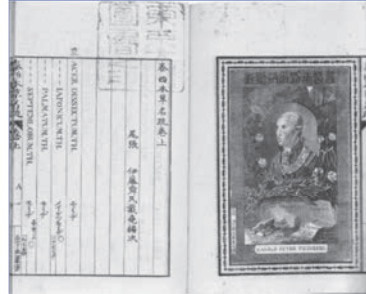


図-4 泰西本草名疏  
小石川植物園蔵



図-5 伊藤圭介  
モース著「Japan Day by  
Day」より

東インド会社の医師として雇用され、アラビアの気候不順な土地も経験し、インド経由でバタビアへ渡った。その後、長崎出島の医師として来日することとなった。2年間の滞在の後、バタビア、喜望峯経由でオランダへ帰り、ライデン大学で医学博士号を得て、故郷へ帰った。学位論文は、「廻国奇観」のテーマが対象となっており、その中には日本のモグサや鍼灸も含まれている。母国ドイツでは、リッペ伯爵の侍医として仕え、日本での経験は前号で述べたように「廻国奇観」や「日本誌」として著わした。なお、その中に登場する將軍綱吉との交流、また当時の体制については、母国と比べて、日本では犬將軍として評判の良くない綱吉も英邁な優れた君主として評価しているが、この紹介は本稿の範囲を超えるので、他著に譲る（ボダルトーベイレー, A 1994）。

## その後のツェンペリー

ツェンペリーがスウェーデンへ帰国した時、既にリンネ(図-2)は亡くなっており、その息子の小リンネがリンネの講座を担当していた。しかし、彼も早く亡くなったので、ツェンペリーがリンネの後任となった。この間に、自ら調査を行った日本の植物のリンネ式の二命名法による記載を行うとともに、ケンペルによってもたらされた資料の調査を行った。ケンペルの資料はそのころまでに、前稿で述べたように大英博物館にあるので、それらも整理しまとめたのである。その成果が、「日本植物誌 (Flora japonica)」であり、これによって日本産の主要な植物の学名が定まった。それらは、アオキ (*Aucuba japonica* Thun.) (図-3)、ヤツデ (*Fatsia japonica* Thun.) であり、ツェンペリーにより命名された日本産の植物(そのころまでに中国他から導入されていたものを含む)が極めて多いのは、このような理由によるのであり、牧野を始め、各種の植物図鑑を開いてみるとすぐわかる。なお、アオキの *Aucuba* は、ケンペルにより取られた方言のアオキバを反映し、ヤツデの *Fatsia* は、ツェンペリーがハウチハから採用したと推定されている。このような経緯で、これら

のタイプ標本はウプサラ大学にある。次稿に述べるシーボルト (P.F. von Siebold) のもたらしたものはオランダ ライデンの国立標本館にあるが、それと並んで双璧である。特記すべきは、この「日本植物誌」をシーボルトから贈られた伊藤圭介 (1802年～1900年) が、その訳書「泰西本草名疏」を1829年に著わしたことであり(図-4)。それ以来、近代的な植物分類法は日本に広まることとなった。その伊藤圭介(図-5)は、幕府の蕃書調所で働くも、いったん名古屋へ帰り、明治維新後新政府の要請を受けて上京し、文部省で働き、東京大学が1877年に創立されるとそこで員外教授として働いたが、その時75歳であった。講義することはなく、もっぱら植物園で植物調査にあたったが、彼のところには、東京大学の初代動物学教授モース (E. S. Morse)、アメリカから招聘された文部省顧問マレー (D. Murray)、イギリスの外交官サトウ (E. Satow)、日本薬局方に貢献している薬学者ヘールツ (A. Geerts) など当時日本を訪れていた著名な外国人の多くが頻りに訪れて、植物情報を得ていたことは、伊藤圭介日記(圭介文書研究会編 2010)からわかる。それは、伊藤圭介は日本の実地の植物の状態を最もよく知っていたからである。

ツェンペリーは、その後もリンネ講座の席にあって人々の尊敬を受け、ウプサラ大学の学長にも選任されるという順調な人生を過ごし、85歳で亡くなった。なお、1976年にはツェンペリー来日200年を記念して日本でも催し物があり、東京大学小石川植物園のクロマツにはその記念の説明パネルがつけられたが、クロマツの学名 *Pinus thunbergii* は、彼の顕著な功績を記念してつけられていて、日本とスウェーデンともその時から繋がっている。

## 文献

- 圭介文書研究会編 2010. 伊藤圭介日記第16集, 名古屋市東山植物園.
- 長田敏行 2014. イチヨウの自然誌と文化史. 裳華房.
- ボダルトーベイレー, A 1994. ケンペルと將軍綱吉, 中直一訳, 中公新書.